Program Notes

後藤 菜穂子（音楽ライター）

本日のプログラムは、旅、そして芸術家のさすらいや苦悩といったテーマを軸に構成されている。ドン・キホーテの冒険譚や「ピエロの歌」、ヴォーン・ウィリアムズが描いた20世紀のさすらい人、オペラ《戦争と平和》の悩めるアンドレイなど、それぞれの想いに大西宇宙さんがその輝かしい声と演技力で迫る。作曲者もフランス、イギリス、オーストリア、ロシア、イタリアと多岐にわたり、聴き手を空想の旅に誘（いざな）ってくれるだろう。

まずは、セルバンテスの古典的名著『ドン・キホーテ』にインスパイアされたフランスの作品を2曲お聴きいただこう。**ジャック・イベール（1890〜1962）**はオネゲルやミヨーと同世代の作曲家。若い頃は歌手の伴奏や無声映画の楽士として生計を立て、のちにオペラや芝居、バレエや映画の音楽を多く手がけた。とりわけ1930年代には11本の映画音楽を作曲し、そのうちのひとつがオーストリアの映画監督パープストによる『ドン・キホーテ』（1933年公開）であった。主人公を演じたのはロシアの名歌手フョドール・シャリアピン！ 映画の中で彼が歌ったのが**《ドン・キショットの4つの歌》**であり、録音ではイベール自身が指揮を行った。原曲は歌とオーケストラだが、イベール自身が歌とピアノのために編曲した。

興味深いことに、映画のストーリーは原作に基づくが、歌曲の歌詞はセルバンテスからは採られていない。4曲のうち第1曲「出発の歌」は、フランスの16世紀の抒情詩人ロンサールの詩を用いており、やや古風な響きが特徴だ。スペインの民族色が鮮やかな「ドゥルシネア姫に寄せる歌」、「公爵の歌」はいずれも恋の歌。哀愁を帯びた終曲では、死に瀕したドン・キホーテが道化役の相棒サンチョ・パンサを慰め、別れを告げる。

一方、**ジュール・マスネ（1842〜1912）**の**オペラ《ドン・キショット》**は、イベールの歌曲より20年ほど前に書かれ、1910年2月にモンテ・カルロ歌劇場で初演された。その時にタイトルロールを歌ったのがシャリアピンだったというのもおもしろいつながりだ（マスネ自身は、パリ初演を歌ったヴァニ＝マルクーのほうを好んだと伝えられているが）。「**笑え、哀れな理想家を**」は、第4幕の終盤でサンチョ・パンサが歌うアリア。旅から故郷に帰ったドン・キホーテはドゥルシネアにふられ、人々に嘲笑されるが、サンチョは彼を見捨てない。

サンチョ・パンサの歌から道化つながりで歌われるのは、**エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト（1897〜1957）**の若き日の傑作**《死の都》**（1920年初演）より通称「**ピエロの歌**」である。原作はベルギーの作家ローデンバックの幻想小説で、死んだ妻を忘れられない主人公が、彼女とそっくりな踊り子のマリエッタに心を奪われる物語。マリエッタの一座に所属しているピエロ役の役者フリッツが昔の恋を回想する、甘く切ない望郷のアリアだ。

20世紀前半の英国で活躍した**レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ（1872〜1958）**は、特に管弦楽の作品が有名だが、一生涯、歌曲のジャンルでも創作を行ない、また民謡の採集家としても知られた。「リンデン・リー」や「静かな真昼」など、今でも愛唱されている曲は多い。

《旅の歌 Songs of Travel》は、30代初めに作曲された瑞々しい連作歌曲集。現行版は全9曲から構成されるが、1904年にロンドンのベヒシュタイン・ホール（現在のウィグモア・ホール）で初演された際には8曲から成り、第9曲は作曲者の死後に発見されて加えられた。

歌詞は、ロバート・ルイス・スティーヴンソンの同名の詩集（1895年死後出版。44編から成る）からヴォーン・ウィリアムズが選んだもの。スティーヴンソンといえば『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』などで知られるが、彼自身、大の旅好きであり、「私は旅のために旅をするのです」という名言も残している。

ヴォーン・ウィリアムズの旅人には、シューベルトの《冬の旅》の主人公ほどの悲愴感はないが、いずれにしても目的のある旅というよりは、さすらいの旅といえるだろう。

最初の4曲にはゆるやかなストーリー性が認められ、主人公が旅に出て（「放浪者」）、恋に落ち（「美しい人を目覚めさせよ」）、いったん落ち着くが（「道端の火」）、やがて恋人に別れを告げる（「若者と愛」）。そのあとは行動はなく、夢（「夢の中で」）や心のうちが歌われる。調性の面から見ても、最初の4曲は遠い調へ飛ぶのに対し、第5〜9曲はハ長調／短調とニ短調のあいだを行ったり来たりする点も象徴的だ。特に第7曲「どこに俺はさすらうのか」は初めに書かれた曲で、曲全体の中核を成す。エピローグのような終曲「上り坂、下り坂を僕は歩いてきた」では静かに人生が回顧される。

後半は**グスタフ・マーラー（1860〜1911）**の**《リュッケルトの詩による5つの歌》**で始まるが、ヴォーン・ウィリアムズの《旅の歌》とほぼ同時期の作品なのは何か意図があるのだろうか?

マーラーがドイツの詩人フリードリヒ・リュッケルト（1788〜1866）の詩にのめりこんだのは、《子どもの不思議な角笛》を書き終えたあとだった。《リュッケルトの詩による5つの歌》として知られる5曲は1901〜02年にかけて個別に作曲されたもので、一貫したテーマはなく、歌う順序も歌い手が決めてよい（順序によって聴き手の印象も変わってくる）。このうち、「美しさゆえに愛するなら」以外の4曲は、1901年の夏にオーストリアのヴェルター湖畔の作曲小屋で書かれ、1905年1月にウィーン楽友協会の小ホールにおいて、オーケストラ版で初演された（原曲は歌とピアノだが、オーケストラ版もマーラー自身による）。一方、「美しさだけで愛するなら」は1902年の夏、アルマとの結婚後に作曲されたきわめて親密な作品で、単独で演奏されることも多い。

本日の演奏順では、2つの愛の歌――「やさしい香りを吸い込んだ」と「美しさだけを愛するなら」――が最初に置かれる。いずれも甘美で夢見心地な旋律と芳醇なハーモニーが特徴だ。「わたしの歌曲を覗かないで」は、警戒心の強い芸術家の心理を軽妙に描く。ピアノのせわしない音型は詩に出てくるミツバチを表現する。一方、「わたしはこの世から忘れられ」と「真夜中に」では、芸術家の孤独や喪失感が歌われる。マーラーにとって歌曲が交響曲の源泉であったことはよく知られているが、これらの歌曲は交響曲第5番と同時期に書かれており、実際、同曲に用いられているモチーフが聴き取れる。

プログラムの最後を飾るのは、有名な文学作品を原作とした2作のオペラより、バリトンの歌う名場面である。「輝くばかりの春の夜空だ」は、**セルゲイ・プロコフィエフ（1891〜1953）**の**《戦争と平和》**（1945年初演、原作トルストイ）の冒頭でアンドレイ公爵が歌うアリオーソ（原作では第2部第3編）。ナポレオン戦争から戻って以来、鬱屈とした日々を送っていた公爵だが、美しい春の月夜に若きナターシャと出会い、再び青年のような思いや希望が心の中に涌き起こる。

ジュゼッペ・ヴェルディ（1813〜1901）の**《ドン・カルロス》**（1867年初演、フランス語版）はシラーの戯曲に基づく。アリア「**私の最期の日**」は、死を覚悟したロドリーゴが、親友の王子カルロスに別れを告げる歌。自らが身代わりとなって王子を救おうとする彼の気高い友情が胸を打つ。

歌詞日本語訳

イベール：ドン・キショットの4つの歌

I. 出発の歌

大理石と斑岩で建てられたこの新しい城
それは愛が自らの帝国を築くため
天のすべてがその才を尽くし建てたのです

それは悪と戦う要塞であり
高貴な心を持つ姫をかくまっている城
その姫の瞳は見るものの心を奪い 服従させてしまう

誰も近づくことの出来ない城塞なのです
もし彼が偉大な王達から人々を救うことが出来なければ

勇敢で 愛に溢れた どんな冒険心を持った騎士でも
そのような素質がなければ この城には入れない

II. ドゥルシネア姫に寄せる歌

ああ一日が 一年のようにも感じる
愛するドゥルシネア姫に会うまでは
しかし 彼女の美しい顔が私の苦痛を和らげる
泉と雲 すべてのオーロラと花のように

ああ一日が 一年のようにも感じる
愛するドゥルシネア姫に会うまでは
永久に近く 永久に遠い星が
私の疲れ果てた旅を照らす
彼女の吐息がそよ風となって
私にジャスミンのような香りを届けてくれた
ああ一日が 一年のようにも感じる
愛するドゥルシネア姫に会うまでは

III. 公爵の歌

ここでは私の夢の姫について歌いたいのだ
幾百年もの泥から私をすくい上げてくれた
彼女のダイヤモンドの心は 決して嘘で汚れることなく
バラでさえ彼女の頬を見ると 青ざめてしまうのだ

彼女のために 私は高貴な冒険を試みてきたのだ
私の腕は姫に忠誠を誓い 魔法使いを屈服させ
偽証者を混乱させ 宇宙の理をねじ曲げてまで
彼女に敬意を示したのだ
あなたの美しさに囚われることなく
この地上を一人旅してきた私が
他の無謀な騎士を差し置いてでも
あなたの比類なき美徳と高貴さを
ここに宣言するのだ

IV. ドン・キショットの死の歌

泣くな サンチョ・パンサ 私の忠実な友よ
おまえの主人は死んでない 遠くにも行っていない
すべてがピュアで 偽りのない島に行っただけだ
やっと見つけた島なのだ お前も後で来るといい
この望みの島では たとえ私の本が燃やされ 灰となっても
たとえその本たちに私が殺されることになっても
一冊だけに私は救われるのだ
生の中にある偽り そして死の中にある真実
それが哀れなドン・キショットの 奇妙な運命なのだ

（詩：ピエール・ド・ロンサール／訳：大西 宇宙）

マスネ：歌劇《ドン・キショット》より「笑え、哀れな理想家を」

── *サンチョ・パンサが、*
ドン・キショットを侮辱する人々の間に割って入る ──

サンチョ

やめろ！なんと卑劣なことを…！
ご婦人方に紳士殿…
ここに気高く立っておられる英雄に、なんという侮辱を…！

笑うがいい この哀れな夢想家を！
彼は夢見るままに旅歩き 着飾らず
愛と慈悲の心を説いてきたのだ
かつての救世主（キリスト）のように…！
その破れた服を 見窄らしい身なりを笑うがいい
かつておまえ達のような卑しい人々が
あの聖人を笑ったのと同じように

さぁ 行きましょう旦那！
私たちの旅を続けるのです！
卑屈なものと戦い 恵まれない者達にパンを与え
人の心に善意の火を灯す 崇高な旅を…！
行きましょう 私のご主人様！

（詩：ピエール・ド・ロンサール／訳：大西 宇宙）

コルンゴルト：歌劇《死の都》より「あこがれと空想はよみがえる」（ピエロの歌）

フリッツ

あこがれ
空想
僕を夢の中へ引き戻す
ダンスの中にあった幸せは今はない
ライン川のほとり 月影のダンス
彼女の青い瞳はすべてを語っていた
瞳は言葉を告げるものだった
「ここにいて」
「故郷での幸せを忘れないで」

あこがれ
空想
その魔力は遠い今もなお僕の心を焦がしている
ダンスの魔力が誘う
僕は道化だったと
素敵な恋人よ
彼女にしたがって 涙のキスを知った
陶酔と悲嘆
幻想と幸福
それが道化の定め

（台本：パウル・ショット／共訳：萩原 務、大西 宇宙）

ヴォーン・ウィリアムズ：旅の歌

I. 放浪者

好きなように僕の人生を送らせてくれ
他のどうでもいいことは何処かへいってしまえ
陽気な空がほしい
それと足元には脇道を
星が眺められる茂みとベッドと
川の水に浸すパン
僕のような男の生き方はそこにある
永遠の生き方がそこにある

いずれ嵐が来ようとも
何だろうとこの身に降りかかるがいい
まわりに広がる大地をくれ
そして僕の前に続く道を
富など探さない 希望も愛も
俺を知る友人もいらない
探すのはただ頭上の空と
俺の足元の道

秋よ訪れるがいい
僕のさすらうこの野原へと
木の上の鳥を黙らせ
冷たくなった指を凍えさせながら
霜の野原を粥のように白くし
たき火のそばの休憩所を暖かくてほしい
秋などに僕は負けはしない
冬にも決して！

遅かれ早かれ嵐が来るのだろう
どんなことでもこの身に降りかかるがいい
あたりに広がる大地がほしい
それに俺の前に続く道を
富など探さない 希望も愛も
僕を知っている友人もいらない
探すのはただ頭の上の空と
俺の足元の道

II. 美しい人を目覚めさせよ

美しい人を目覚めさせるんだ
この朝に 美しき夢から
美しい人よ 休らぎより目覚めるんだ
美しい人を目覚めさせるんだ
その美しさのために
茂みで鳥たちが夜明けに目を覚ますときに
西の空に星が輝くときに

美しい人を目覚めさせよ
この夕に 日中のまどろみのなかから
夕映えのなかへ目覚めよ！
一日の暮れ行く終わりのときに
影が長く延びるときに
彼女を目覚めさせよ
優しき友のくちづけに
もういちど身をまかせ 受け入れるように！

III. 道端の火

僕は君にブローチや髪飾りを作ろう
君に喜んでもらえるように
朝の鳥の歌と夜の星の輝きで
君と僕にぴったりの宮殿を作ろう
森の緑色の日々と 海の青色の日々のなかで
僕は台所をつくるから 君は自分の部屋を整えるがいいよ
川が白く流れ 花が明るく輝くところで
君の白いリネンを洗い 白い服のままでいるがいい
朝の雨の中でも 夜の露が降りる時にも

そしてこれは 君以外のほかに
誰もいないときに
歌うのが素敵だろう
めったに聴けない歌になるだろう！
僕が覚えているただひとつのもの
君が憧れるただひとつのもの
それはずっと続いて行く広い道と
そして道端の火の歌なんだ

IV. 若者と愛

若者の心にとっては
この世界は高速道路のかたわらに
永遠に通り過ぎ去っていくが
その一方で世界は
庭の奥の黄金の建物の中に隠れて
果樹園の花に身をうずめ 平地のはるか向こうで
夕暮れにランプに火を灯しながら彼を呼んでいる

月が沈む夜 星たちのように濃密に
快楽が彼に襲いかかるが
彼は自分のより高貴な運命に向かって
旅していく 通り過ぎながらただ手を振りながら
気まぐれな一言だけを叫ぶ 庭の門に立つ彼女に向けて
ただあどけない旋律を歌い その顔は消えていく

V. 夢の中で

不幸な夢の中で 僕は君が立ってるのを見た
昔のままに
君の手の中の 思い出されることのない
もはや役に立つことのない

もはや朝の輝きも 優美さも
大切ではないし いとしくもない
冷たさが君の顔を照らし
君の涙を露わにする

彼は来てそして去った
恐らく君はほんの少しだけ泣いて
忘れたろう
けれど僕は！
微笑んで君から去った男は
君を忘れてはいないんだ

VI. 無限に光り輝く天上に

無限に光り輝く天上に
昇ったのを 夜 僕は見た
数限りない天使の星たちが
悲しみと光をふりそそぐのを

僕は天使たちを天の彼方に見た
沈黙し 光り 死んでいるのを
夜の動かぬ星たちは
僕にはパンよりもいとおしい

夜ごと悲しみの中で
星たちは海を見渡していた
僕は夕闇の中に見た
ひとつの星が僕のもとに降りてくるのを

Ⅶ. どこへ俺はさすらうのか？

自分の家はもう我が家ではない
俺は何処へさすらうのか?
飢えていることが力となって
俺は行くべきところへ行く
冬の風は丘やヒースの野原に冷たく吹く
激しく降りつける雨 家の屋根は土埃の中
賢き人々に愛され 家の屋根の陰
真の歓迎の言葉が戸口で語られ
昔の愛しき日々 暖炉の火に照らされた顔がある
懐かしい仲間たち あなたたちはもう戻らないのだ

我が家はあの時我が家だった
愛する君 優しい顔に満ちて
我が家はあの時我が家だった
愛する君 子どもにとって幸せなことに
炎も窓も明るく荒れ地を照らしていた
歌が 美しき歌が 荒地に宮殿を築いていた
夜明けが荒地の縁を照らした時でさえも
家はひっそりと立ち 煙突の石も冷え切っている
さびしく立っているんだな
いまでは友は皆いなくなったのだ
懐かしい場所を愛した
優しい心や真実の心の持ち主たちは皆

春は来るだろう 再び来るだろう
荒地の鳥たちを呼び起こしながら
春は太陽や雨を呼び寄せ
そして雨は花とミツバチを呼び寄せるだろう
赤くヒースは花咲くだろう 丘や谷間の上で
やわらかく水は流れるだろう
同じように流れる時間の中で
太陽は明るく輝くだろう
俺が子どものころに輝いていたように
太陽は明るく輝くだろう
玄関を開け放った家に
鳥たちはそこにやってきて鳴き
煙突の中でさえずるだろう
けれど 俺は永久に去り
もう戻ってはこない

Ⅷ、輝かしきは言葉の響き

輝かしきは言葉の響き
正しき人がそれを響かせるとき
美しきは歌の調べ
歌手が歌を歌うとき

言葉や歌は今もなお讃えられ 語られる
翼に乗って 運ばれ続ける
歌手が死に
作り手が葬られた後にも

その歌手が横たわっているほども低く
ヒースの野原の中に
彼のスタイルの歌は
恋人たちを引き合わせるのだ
西の空が赤く染まる時
暮れていく日の残り火に
恋する男たちは一緒になって歩き歌い
女たちはそれを忘れない

Ⅸ. 上り坂、下り坂を僕は歩いてきた

僕は 上り坂 下り坂を歩いてきた
ずっと耐えてきた
そして何日か前にそれは終わった
すべてのものをずっと求めてきた
そして希望に別れた
生きて愛したそこに扉を閉めた

（詩：ロバート・ルイス・スティーヴンソン／訳：大西 宇宙）

マーラー：リュッケルトの詩による5つの歌

Ⅰ. やさしい香りを吸い込んだ

やさしい香りをかいだ
部屋には菩提樹の枝があって
それは愛しい人からの贈られたもの
菩提樹の香りのなんて素敵だったこと
そして今でもその香りは愛らしい
その菩提樹の枝はあなたがそっと折ったもの
菩提樹の香りの中に
そっとやわらかな愛の香りをかいでみる

Ⅱ. 美しさだけで愛するなら

美しさがゆえに愛するなら 愛さないでもいい
太陽を愛すればいい 金色の髪なのだから
若いから愛するのなら 愛さないでもいい
春を愛すればいい 毎年若くなれるのだから
宝石を持っているから愛するのなら 愛さないで
人魚を愛すればいい
綺麗な真珠をたくさん持っているのだから
愛のために愛するなら そう わたしを愛してください
いつも 私を愛して
わたしもあなたを永遠に愛します

Ⅲ. わたしの歌曲を覗かないで

わたしの歌曲を覗かないでください
悪いことしているのを見つかった時のように
うつむいてしまう
作っている途中を眺めるのは
いけないこと
わたしの歌曲を覗かないでください
あなたの好奇心にはうんざりです
蜂達だって巣を作る時
見せたりしない
自分たちでさえ見たりしない
ハチミツでたっぷりと溢れた巣が
できあがったその時には
まっさきに食べてください！

Ⅳ. わたしはこの世から忘れさられ

わたしはこの世から忘れ去られた
たくさんの時間を無駄にしてきたそこから
もう永いこと誰もわたしを気に掛けなくなった
きっとわたしは死んでしまったと
思われているのだろう！
もし そう思われていたとしても
わたしにはどうでも良いことだ
わたしはそれに何も言うことはできない
なぜなら わたしはこの世で
ほんとうに死んでいるのだから
世の中の喧騒の中 死んで
そして静かな場所に安らいでいる
わたしは 一人でそっと生きていく
わたしだけの至福のなかで
わたしだけの愛の中で
わたしだけの歌のなかで

Ⅴ. 真夜中に

真夜中に 目が覚めて 空を見上げた
無数の星のどれひとつ
わたしに笑いかけてはくれなかった

真夜中に暗いなかでもの思いにふけっていた
わたしを慰めるような
明るい希望はなかった

真夜中に自分の鼓動に
耳を澄ましてみた
苦悩の鼓動だけが
速かった

真夜中に 戦いを挑んだ
おお人類よ お前たちの悲しみは と
わたしの力では及ばなかった
真夜中にわたしは力をあなたに委ねた
主よ 死と生をつねに見守っておられる

（詩：ピエール・ド・ロンサール／共訳：萩原 務、大西 宇宙）

プロコフィエフ：歌劇《戦争と平和》より
『輝くばかりの春の夜空だ』

アンドレイ侯爵

なんと澄み切った春の夜空だろう…
これは嘘ではないのだろうか?
太陽や春や幸福は本当に存在しているのだろうか?
今日 森を通ってきた
すべてが緑だ
白樺もはんの木も若葉となって茂っていた
青い草の間からは 春に最初に咲く花々が
明るく顔をみせている
道の傍らには古傷や曲がった太い枝や
小枝をつけた巨木が立っていた
あたかも 不機嫌で人を見くだす偏屈な男のように
枯葉の白樺のなかに立ち こう言っているようだった
「春も 愛も 幸福もすべてが愚かで
無意味な錯覚でしかないんだ
春も 太陽も 幸福も存在しないのだ」

（台本：セルゲイ・プロコフィエフ、ミーラ・メンデルソン
／共訳：萩原 務、大西 宇宙）

ヴェルディ：歌劇《ドン・カルロス》より
『わたしの最期の日』

ロドリーゴ

私です カルロ様
あなたはこの恐ろしい牢獄から出られるでしょう
もう一度あなたを抱きしめることができるのは幸せだ！
私はあなたを救った！
ここでお別れを告げねばなりません！ 私のカルロよ！

私の最期の時がやって来ました
もう 二度と会えないでしょう
神がわたしたちを天上でも引き合わせてくれるよう祈ります
あなたの目に涙が映ります
なぜそのように泣くのですか?
泣かないでください 心を強くもってください
あなたのために死ぬ者にとって
最期の瞬間（とき）は幸せなのです

ああ カルロ お聞きください
母君はすべてご存じです
明日サン・ジュストであなたを待っています
ああ 意識が遠のく… 私のカルロよ
手を差し伸べてください…！

私は死にますが でも心は幸せだ！
スペインの救世主に
このようにお仕えする事ができたのだから！
ああ 私の事を 忘れないください

あなたが統治しなければいけません
そして私はあなたのために死ぬのです
ああ 意識が遠のいていく… 手を 私に…
ああ フランドルを救ってください…
カルロ さようなら ああ…！

（台本：フランソワ・ジョセフ・メリ、カミーユ・デュ・ロクル
／共訳：萩原 務、大西 宇宙）

歌詞等の無断転載は固く禁じております。